

元気スイッチ on!!

あつまれ！あいちのじどうかん

つながる力！
みんなでつくる
児童館



2025年
11月30日[日]

10:00-16:15

へきしんギャラクシープラザ (安城市)

report



主催：愛知県児童連絡協議会、名古屋市児童館連絡協議会、
愛知県児童総合センター（公益財団法人愛知公園協会）
共催：愛知県
企画運営：元気スイッチon!! あつまれ！あいちのじどうかん実行委員会
後援：名古屋市、一般財団法人児童健全育成推進財団、
愛知県地域活動連絡協議会、全国児童館連絡協議会、
全国児童厚生員研究協議会、中日新聞社

目次	01
開催概要・日程	02
開会式	03
基調講演	06
第1分科会	11
第2分科会	14
第3分科会	17
出前じどうかんーあそびばー	20
アピールカード	23
情報交換	24
閉会式	25
実行委員会	26

開催概要

- 主 催：愛知県児童館連絡協議会
名古屋市児童館連絡協議会
愛知県児童総合センター（公益財団法人愛知公園協会）
- 共 催：愛知県
- 企画運営：元気スイッチ on!! あつまれ！あいちのじどうかん実行委員会
- 後 援：名古屋市
一般財団法人児童健全育成推進財団
愛知県地域活動連絡協議会
全国児童館連絡協議会
全国児童厚生員研究協議会
中日新聞社

日程

2025年11月30日（日）

- 10:00～10:30 開会式
10:30～11:30 基調講演
13:00～15:30 分科会
15:45～16:15 閉会式

10:45～15:15 あそびば

■ 主催者あいさつ

名古屋市児童館連絡協議会
会長
江口 このみ



本日は、「第14回 元気スイッチon!! あつまれ! あいちのじどうかん」にご参加いただき、誠にありがとうございます。皆さんとともに「みんなで作る児童館を考える特別な一日」を過ごせることを、大変嬉しく思います。また、開催に向けてご尽力くださった皆様に、心より感謝申し上げます。

児童館は、こどもが自分の意思で利用できる施設です。遊びを通して自分らしく過ごし、友だちとともに成長していく場所。そして子育て中のパパママがほっとできる場所でもあります。さらに地域の皆様にとっても、安心してこどもを送り出せる「居場所」でありたいと、皆様は日々願いを込めてこどもに向き合っておられることと思います。

本日は、そんな方々が集まる貴重な機会です。今年のテーマは「つながる力 みんなで作る児童館」。こどもや保護者の声に耳を傾けながら、「こんな児童館があったらいいな」を形にするヒントがきっと見つかるはずです。

こどもの笑顔が保護者の安心につながり、地域の絆へと広がっていく—そんな未来を思い描きながら、明日から実践できる一歩を見つけていただければ幸いです。今日の学びや出会いが、明日の児童館をより豊かにする力になると信じて、主催者を代表してご挨拶申し上げます。

■ 共催者あいさつ

愛知県福祉局子育て支援課
担当課長
伊藤 純子 様



ただ今、御紹介をいただきました愛知県福祉局子育て支援課の伊藤でございます。

本日は「第14回 元気スイッチon!! あつまれ! あいちのじどうかん」に、大変多くの方々に御参加いただき誠にありがとうございます。

また、皆様方には、日頃から児童館や放課後児童クラブなどにおいて、未来を担う子どもたちの健全な育成に向けて、御尽力をいただいております。この場をお借りして厚くお礼を申し上げます。

さて、近年、地域のつながりの希薄化や少子化の進行により、子ども同士の育ち合い・学び合いの機会が減少しております。このため、子どもが安全に安心して過ごせる児童館の重要性が今後ますます高まっていくものと考えております。

本県におきましても、愛知県児童総合センターにおいて、蓄積してきた様々なノウハウを活かし、県内児童館の中核的機能を担いながら、地域の児童館の活動支援を行うとともに、子ども・若者の心身の安全が確保され、安心して過ごせる居場所づくりの促進を図るなど、地域の児童館活動の充実に努めているところでございます。

今後とも、皆様方と協力・連携しながら、児童の居場所づくりを始めとする子育て支援の充実に取り組んでまいりたいと考えておりますので、お力添えのほどよろしくお願いいたします。

なお、本日は、新潟県立大学人間生活学部子ども学科 植木教授より「こどもとつくる児童館と改正児童館ガイドラインの活用」をテーマとした基調講演をいただき、また、様々なテーマに沿った分科会が行われます。

「児童館ガイドライン」につきましては、近年の「こども基本法」の制定や、「こどもの居場所づくりに関する指針」の策定等を踏まえ、令和7年4月1日付で改定されたところでございます。本日のこうした機会が、皆様方にとっての制度理解や、現場で抱えている課題に対する解決の一助となりますことを期待しております。

最後になりますが、本日御参加の皆様方の益々の御発展と御健勝を祈念いたしまして、私からのあいさつとさせていただきます。

■ 来賓あいさつ

愛知県地域活動連絡協議会
会長
加藤 愛子 様



おはようございます。

只今ご紹介にあずかりました愛知県地域活動連絡協議会の加藤でございます。

本日ここに、「第14回 元気スイッチon!! あつまれ! あいちのじどうかん」が開催され、誠におめでとうございます。

今年のテーマは、「つながる力! みんなでつくる児童館」と伺っております。児童館は、子どもたちにとりまして、年齢差、学年差を超えて楽しく遊び、学ぶことができる大切な居場所であります。

私たちは、その児童館を拠点に活動をしているボランティアの団体で、今年で43年目を迎えました。設立当時は、子どもたちも多く、町中でにぎやかな子どもたちの遊ぶ声が聞こえ、その傍らで親たちが子どもを見守りながら井戸端会議をしていたものでした。こうした恵まれた環境で、子どもたちはのびのびと育ち、親たちも地域の絆が強く、お互い深い信頼関係でつながって、助け合う心豊かな生活を送っていたように思います。

時の流れとともに、社会の状況も大きく様変わりし、すべての環境が変化してまいりました。女性の社会進出と家族の絆や地域の連帯感の希薄化に伴い、少子化の進行や虐待、いじめなど、複雑で多様な問題が生じてくるなど、深刻な状況にあります。

そのような中、“こどもまんなか”と言われる現在、私たちは変わることなく、これからも地域の子どもの健やかな成長を願い、活動をしてまいります。

これまでの活動の中で、子どもたちから学ぶこともたくさんありました。「地域の子はみんな我が子」という誠心に基づき、これからも子どもたちのために児童館の皆さまのご協力をいただきながら活動をしていきたいと思っております。

結びに、本日の大会のご成功とご参加の皆さまの益々のご活躍、ご多幸を祈念申し上げ、私のあいさつとさせていただきます。

基調講演

こどもとつくる児童館と改正児童館ガイドラインの活用 ～こどもの意見形成を支援する～



【講師】 植木 信一さん

新潟県立大学 人間生活学部 子ども学科 教授

【プロフィール】

元・社会福祉法人名古屋キリスト教会館 放課後児童クラブ職員

新潟県立大学の前身である県立新潟女子短期大学 生活科学科生活福祉専攻講師を経て現職
新潟県立大学 人間生活部 子ども学科 学科長

厚生労働省 社会保障審議会 児童部会 放課後児童対策に関する専門委員会 専門委員

こども家庭庁 こども家庭審議会 こどもの居場所部会 委員 (第1期)

こども家庭庁 こども家庭審議会 児童厚生施設及び放課後児童クラブに関する専門委員会 委員

《 編著・著書 》

「最新教育動向2025」待機児童問題と放課後児童対策の強化 明治図書、「子ども家庭福祉 (初版第2刷)」編著 北大路書房、「改訂保育者が学ぶ子ども家庭支援論」編著 建帛社 など

みなさんおはようございます。

新潟県立大学で児童福祉を教えております、植木信一と申します。よろしく申し上げます。

まずは、第14回大会の開催、おめでとうございます。これまでの積み上げが今日の開催となったのだと思います。ここまでの準備と長年のノウハウや連携があり、愛知の児童館は大丈夫だなと思った次第です。

先程の紹介にもありましたが、私は名古屋市南区にある名古屋キリスト教会館という地域福祉施設に勤務していました。そこは伊勢湾台風の被災地で、セツルメント等を経て、つくられた地域福祉施設です。私は新潟が出身ですが、大学が愛知で、愛知で働くことになったわけです。その時の放課後クラブのこどもたちや地域との関わりが私の原点であり、社会福祉を専門として、特に児童館・児童クラブに焦点を当て、長年取り組んできました。

私は、こども家庭庁の専門委員会に所属していますが、昨年、こども家庭庁は、「児童館」に注目をしています。こども家庭庁のキャッチフレーズに「こどもの居場所はこども・若者自身が決める」というものがありますが、「こどもの居場所」について、数年かけて議論し、その筆頭に児童館が位置づけられました。放課後児童クラブも含め、

学校教育以外の場でのこどもたちへの関わりを重視していくという国の方向性が示されました。

「こどもとつくる児童館」という視点

つながり続けるこどもたち

今日は「こどもとつくる児童館」というタイトルを付けました。「みんなでつくる児童館」ということですが、「みんな」という時に私たちがまず発想するのは、「仕事仲間」です。でもそこにこどもたちは入っているのでしょうか？「こどもとつくる児童館」というのが、むしろ大事な視点だと思います。

私が勤務していた放課後児童クラブでは、当時から6年生まで受け入れていました。でも、中学生になった翌日からクラブに顔を出す子がいたんです。最初は「来たよ」とか、声をかけてやって来て、そのうち、普通に中学生が「いる」という状況になっていました。その子は、新一年生の世話をし

たり、職員の手伝いもしてくれました。また、その当時、野外活動の夏のキャンプに児童クラブのOBたちが手伝いに駆けつけてくれるということもありました。児童館・放課後児童クラブは小学生が主な対象ですが、中学生や高校生になっても関われる、そういう居場所だと改めて感じました。また、私が児童クラブを辞めてからですが、当時のこどもたちから「二十歳になったので、自分たちで成人式をやるから、タマ(当時のニックネーム)、取り急ぎ来い。旅費は自前でね」なんて書いてあるハガキが届いたこともありました。学童保育や放課後の関わりの中で出会ったこどもたちが、おとなになっても声をかけてくれる、そういうつながりってあるのだとあらためて思い起こしました。

「こどもの意見形成支援」という考え方

本日は、テーマである「こどもとつくる児童館」を改正児童館ガイドラインとの関わりの中でお話したいと思います。サブタイトルにある「こどもの意見形成支援」については、今とても大事な概念となっていま

す。資料のタイトル左下のウサギのイラストは、「おとなが子どもと向き合い、ウサギの耳を持つ」ということを表しています。「子どもの意見形成支援」というのは、ウサギの耳を持ったおとなが指示するのではなく、子どもたちが考えや意見を醸成し、時間を掛けて自分の言葉にして第三者に伝えられるよう支援することで、子どもたちのコミュニケーション能力の向上にも寄与します。ただその時、子どもに対峙するおとなは、子どものことをよく知っておく必要があります。今日は「子ども会議」の話ですが、最近、行政が子どもたちから意見を聞くということが流行っています。しかし、彼らが行う方法は日時を指定し、役所の会議室などで初対面のおとながいろいろ聞くというものです。でもこれで本音が出るでしょうか？今の子ども、特に中学生などは賢いので、目の前にいるおとなが何を期待しているか、付度した意見を出すのではないのでしょうか。そうして出た意見に満足して成功と捉え、「子ども計画」に反映されるなんてことがあるかもしれません。しかし、本来の「子どもの意見形成支援」というのはそういうことではありません。児童館職員は、日々の関わりの中で、子どもの微妙な変化に気づく立場にいます。「今日元気いいね」なんて声をかけ、「ふつう！」と返ってきたとき、その言い方や表情から、いつもと違う様子を感じ取り、普通じゃないなと察知できる。それは、日常的・継続的な関係性がある児童館職員だからこそです。児童館は子どもの意見形成支援をとおして、子どもとつくり上げることができ、子どもにとってはコミュニケーション能力の向上にもつながります。また、おとなや行政にとっては、子どもたちの本音が「子ども計画」等に反映されるような仕組みに

つながると考えられます。

子ども会議の実例 —結果よりプロセス—

子どもとつくる児童館ということで、ある児童館の「子ども会議」の事例を紹介します。これは、夏祭りに児童館で何か出店できないかという地域からの要望を受け、職員だけで決めるのではなく、子どもたちの意見を聞く場として開催された「子ども会議」です。会議は、黒板の前に椅子が並べられ、子どもが前、おとなが後ろに座って始まりました。黒板にたくさんのアイデアが出ましたが、椅子に座ったままの子どもが二人いました。この二人は会議の参加を希望していたにもかかわらず、終始ゲームをやっていて会議に参加しませんでした。通常、こういう態度をとる子どもがいたら、注意すると思いますが、児童厚生員は何も言いませんでした。終盤、椅子を片付けた後に、わらわらと黒板の前にもう一回子どもたちが集まってきて、会議が継続され始め、先程ゲームをしていた二人の子どもも参加していました。子どもにはそれぞれのタイミングがあり、それぞれのペースで関わるということを職員は理解していたのです。「子ども会議」では、会議が終わった後に子どもたちが意見を言いに来るという場面があります。子どもの意見形成支援において、大切なのは結果ではなく、プロセスだと思います。これが今日の結論のひとつです。プロセスを大事にするということは、時間をかけることを大事にするということです。コロナ禍、私共の大学の授業もオンラインになり、収録したものをオンデマンドで学生たちが自分のペースで視聴し、レポート

を作成するというのが、一気に進みました。私その時、学生に「オンデマンドの録画を全部視聴するのは大変だね。時間足りないでしょ？」って聞きましたら、「大丈夫です。1.2倍速です！」って言われました。1.2倍速、早口の植木がしゃべったんだな、それでも理解するんだなと、その時は思いました。でも児童館の意見形成支援は1.2倍速では聞き取れません。むしろ、0.8倍速くらい少しゆったりと時間をかけることが重要です。すると、子どもも「この児童館のおとなは自分に向き合ってくれた」と感じ、信頼関係が構築され、中高生になっても児童館に顔を出すわけです。

では、児童館だからできる意見形成支援とは一体何でしょうか？この後、以下3点について話を進めていきます。一つ目は、「子どもの意見形成支援とは何か」、二つ目、「子どもの意見形成支援の実例」、そして最後に「児童館ガイドラインの確認と児童館の役割」という形でまとめていきたいと思えます。

「子どもの意見形成支援」とは何か

子どもの権利としての 意見表明とその支援

子どもの意見形成支援とは、子ども自身の意見や意向を表明できる「子どもの権利」のことです。児童健全育成推進財団では、今年度から児童厚生2級指導員資格を取得するための基礎研修会のカリキュラムの一部を改訂し、「子どもの権利」という60分間以上の科目が新設されました。そこでは「子どもの権利とは何か」ということを学びます。子どもたちは自らの意見・意向、考えをその時の発達段階の能力に応じて、自分の中で組み立てて、第三者のおとなや友達に伝えるということを繰り返していますが、年齢によって表現に差がでてきます。それぞれの発達段階に応じ、自分の能力をフル活用して意見形成を図ろうとしているわけなので、年齢の差があろうと同じ価値として、我々児童厚生員は受け止め、支援しなければいけません。その受け止められる権利のことを「子どもの権利」といって、近年、子どもの意見形成を支援する取り組みが注目されています。意見を形成するのは子ども自身ですが、彼らが何とか自分の

第14回

元気スイッチon!!

あつまれ！あいちのじどうかん

子どもとつくる児童館と改正児童館ガイドラインの活用

～子どもの意見形成を支援する～

2025年11月30日(日)

植木 信一

(新潟県立大学子ども学科)



言葉を見つけ、相手に気持ちを伝えようとしても、うまくいかない時、おとながそれを支援するという取り組みが「こどもの意見形成を支援する」ということです。ですから、子どもたち自身が行うことと、我々が関わることに矛盾は生じず、むしろセットでなければいけないということで、こども大綱の中にも含まれました。こども大綱を基に自治体におけるこども施策の立案は、

- ① こどもの意見を聴取する
- ② その意見を反映させる
- ③ できないことも理由を説明して

フィードバックする

という3つの手順で成り立ちます。聴取することは、「こども会議」で行い、できることは反映させます。では、できないことはどうするのか、ここが大事なところです。なぜできないかという答えを準備して、それをフィードバックする。つまり、子どもたちから出てきた意見に対し、理由を説明して返すということです。こどもにとっては、自分の意見を聞いてくれ、何とかしようとしてくれるおとながいる、それが児童館職員だと感じるのではないのでしょうか。

児童館は、地域のすべてのこどもが自らの意思で訪れる場所です。そのため、意見形成支援の場として最適で、子どもたちの主体的な動機に基づく「こども会議」を開催するということが有効となります。出張児童館でも「こども会議」は開催することができます。出張・出前児童館においても、遊びのプログラムや遊具を持っていくことで終わらせるのではなく、そこにいるこどもたちの意見形成支援をセットで行なうことも、今後ますます求められるでしょう。

災害時における こどもの居場所と専門性

ここで、災害時におけるこどもの居場所についても少し触れておきます。昨年の能登半島地震では、1次、2次避難所の他に1.5次避難所が設置されました。この時、金沢大学の鈴木准教授が1.5次避難所でこどもの居場所づくりを進めているということをお聞きし、児童健全育成推進財団の依田さんと一緒に鈴木先生に会いに行きました。実はこの避難所では、だんだん人が増えていき、避難所内のこどものフリースペースが邪魔だと言われるようになって、こどもの居場所がおとなの都合によって徐々に縮小される状況になってきました。また、



DWAT(災害派遣福祉チーム)などの福祉支援チームに、こどもの専門家が含まれていなかったことも課題として浮かび上がりました。この時、育成財団では依田さんが丁寧にヒアリングをされ、全国に声がけをして、スケジュールを組んで全国から募集した児童館職員を現地支援に派遣をするというプログラムをいち早く組み立てて実施されました。このプログラムは今後の活動のモデルになると思いますし、全国の児童館職員はその際の大変有力な力になると思います。

「こどもの意見形成支援」の実際

日常のつぶやきを拾うということ

では次に、「こどもの意見形成支援の実際」について見ていきましょう。まずは、日常の機会を活用するという事です。先程、「こども会議」の話をしました。他にも、日々の子どもたちの様子やつぶやきを拾っていくということが大事だと思います。こどもには意見を言う権利がありますが、こどもにその権利があると伝えることは難しく、「伝えたこと」を形骸化させないためには、こどもに日ごろの活動を選んでもらう機会をつくることと、こどものつぶやきを拾うことを意識することが必要です。でもこれは、児童館で日ごろ行っていることですよね。「こどもの意見形成支援」を市町村のこども計画づくりに組み込む際には、こうした児童館の特性を活用していただきたいですし、児童館に来る子どもたちの意見をこども計画に反映することは、極めて有効だと思います。私がいる新潟市もこども計画を作りました。市内の児童館で意見聴取し、意見形成支援をして、出てきた意見

を担当課へ返し、先日、担当課からこどもたちに直接フィードバックをしてもらいました。市の担当者もこのような率直な意見が出てくるとは思わなかったと言っていましたし、行政も真摯な対応で、子どもたちへの丁寧なフィードバックがあり、児童館の有効利用を大いにアピールをすることができました。一方で、政令指定都市の新潟市では老朽化した施設から廃止していくという方針があつて、そこに児童館も含まれていました。でもそれは違うだろうと、今回のように児童館が有効利用できることを伝え、ぜひ活用してもらおう働きかけました。そのためかは不明ですが、結果、児童館が1館増えることになりました。急転直下でしたが、やはり言い続けることは大事なのだと思いました。

「こども会議」におけるおとなの役割

先程お話しました、地域の夏祭りへの児童館からの出店についての会議内容です。ここでは、あらかじめ進行役を決めて時間を設定し、タイムキーパーも決めました。こどもたちは保護者のいない所で表現したいそうで、これは、こども家庭庁の調査でも同じようなことが出ています。親のいない所で、こどもたちだけで活動したいけれど一方で、何かあったときにはおとなの助けがほしい。一見相反する二つのニーズをこどもたちは持っています。こどもたちは、「おとなは、いらない」と言うかもしれませんが、やはり何かあった時は助けてほしいし、そばにいてほしいと思っています。「こども会議」はまさにこれに当てはまる、ちょうどよい場です。こどもたちだけで進められるし、グッドタイミングで児童厚生員の介入もあります。例えば、こどもたちから夏祭りでクレープ屋さんを出そうという意見が出てきます。みんなが「いいね!」と

話が盛り上がったところで児童厚生員が介入し、クレープを作る必要や作り方、必要機材などについて問ひかけ、思考のヒントを伝えます。それを受け、子どもたちは再度考え始め、話を進めることができます。おとなの介入は最小限にとどめ、子どもの力を信じて待つということがここでは行われていました。徐々に子どもへ仕切り役を移行し、結果的にはたくさんの意見が出ました。話が進むと主体的に議論に参加する子どもが増えてきます。一方で、最後までゲームに夢中のままで終わる子もいますが、終わったとたん、急に参加して意見を言うてくるということもよくあることです。

テーマ設定の3つのレベル

「子ども会議」のテーマ・議題ですが、これには3つのレベルがあることが分かってきました。1つ目は現場レベルです。「児童館を楽しくする方法」や「なぜゴミはゴミ箱に捨てなければならないのか」という議題がありました。ゴミ箱については3年生の発案で、なぜかという1年生がゴミ箱に捨てず、3年生がゴミを拾ってゴミ箱に捨てるということが続き、3年生が児童厚生員に訴えたからでした。その時、児童厚生員が「それなら、子ども会議を開いて、みんなで決めたら？」と提案して「子ども会議」が開かれ、会議で決まったルールは守られるようになりました。おとなが「ゴミはゴミ箱に捨てましょう」なんて掲示したところであまり効果がないですね。やはり自分たちで決めた効果というのは大きいと思います。2つ目の地域レベルにおいては、夏祭りなど地域の行事への参加や地域から要望について話し合うというものです。そして3つ目は、自治体レベルです。「〇〇市につくってほしい子どもの居場所」など、自分たちのために市にやってほしいことや要望も「子ども会議」で聞くことができます。おおよそ、こういった3つのレベルで子ども会議のテーマは設定することができます。資料に実施マニュアルということでまとめました。

子どもの意見とフィードバック

新潟市へ意見を出すため開いた「子ども会議」では、「遊ぶ場所の不足」という意見が出ました。利用する年齢などいろいろな状況を考え、アイディアを出します。その他

に「十分な居場所空間の確保」、「多様な職員構成の必要性」についての意見も出しました。ジェンダーバイアスではないですが、男性職員もいてほしいと子どもたちから要望が出ました。多様な人材が多様な関りに対応できる職員構成、年齢のバランスもあります。「子ども会議」から出た3つの意見は新潟市に返し、市の方から子どもたちにフィードバックしていただき、今後検討を続け、また後日継続された検討からフィードバックがあると思っています。

「児童館ガイドラインによる確認」について

繰り返して言っていますが、「子どもの意見形成を支援する」ということは、

① 聴取

② 反映

そして

③ フィードバック

この3つのサイクルで、この③のフィードバックが最も重要です。すなわち、結果ではなく、過程（プロセス）への丁寧な関わりであり、これが健全育成です。単に「子ども会議」で意見が出て活発でよかった、というのは結果です。「子ども会議」は時にダラダラすることがあり、その会議は1回で終わりません。子ども一人ひとりのペースとタイミングを理解し実施する、児童館の「子ども会議」はプロセスだということです。ダラダラ感じているのはおとなだけであって、子どもたちには、その時のペースというものがあるのかもしれませんが、これこそが「子どもまんなか」ではないでしょうか。

子ども基本法と「子どもの最善の利益」

今般、子ども大綱や子どもの居場所づくりに関する指針を経て「児童館ガイドライン」が改正されたということで、「子どもの権利」や「子どもの意見形成支援」がどのように反映されたかを見ていきます。

資料に主なポイントを6つほど挙げましたが、この内「子どもの権利に関する記述を充実」と「子どもの権利に関する情報提供の啓発」が行われたことについて見ていきましょう。

最初に、「子どもの権利に関する記述」についてですが、ひとつは「子どもの最善の利益」です。理念には、『児童館は、子ども基本法の理念にのっとり、子どもの最善の利益が優先して考慮されるよう、子どもの育成に努めなければならない。』との記述があります。これまでもこの表現はありましたが、ここに、子ども基本法という新しい法律が含まれているということに着目してもらいたいと思います。児童館は児童福祉法に規定する児童福祉施設、児童厚生施設で、児童福祉法に規定される児童福祉施設では18歳未満が対象です。しかし、子ども基本法では、児童福祉法のように年齢で定義をつけていません。対象とするのは、「発達の過程にあるもの」という定義で、18歳を超えても、子ども家庭庁の支援の対象になりうるということです。平仮名で「子ども」と記述すると定義づけられたことは、中高生の支援をこれから手厚くしていかなければならないということで、「子どもは権利の主体」であり、児童館が中高生や若者にとって重要な居場所となり得ることが、制度的にも裏付けられました。

実施マニュアル（案）

【子ども】

- 主体的な所属感の醸成が期待できる「わたし、子ども会議のメンバーになったよ！」
- とくに低学年の子ども → だれかがやってくれることに慣れている → 「我が事」
- 定期的開催されることで、自分たちの意見や意向が反映されていることを日常的に認識できる

【おとな】

- おとなは、子どもたちが困っているタイミングで助言する（議論を整理する役割）
- ファシリテータを担うことで、おとなのほうに鍛えられる（子どもの声を聴く力がつく）
- ①聴取、②反映、③フィードバック、までをコーディネートする

【環境設定】

- あらかじめ、集中力の続く時間（30分～45分程度）を設定し、タイムキーパーをおく
- 視覚的に整理することのできるツールがあるとよい
- 専用の部屋で実施される場合もあれば、プレイルームの一角で実施される場合もある

職員に求められる学びと適切な対応

ガイドラインには、「職員は自ら進んで学ぶ」ということも組み込まれました。児童館職員は、自ら進んで子どもの権利について学習を行い、活動や支援をする必要があるということです。ですから児童館職員は、「子どもの権利」や「子どもの意見形成支援」を具体的に発想できないと現場実践に反映できません。次に「適切な対応」です。当たり前ですが、児童館で「子どもの権利」が侵害される事案が発生した場合、適切に対応する必要があるということです。これまで児童館や放課後児童クラブでは、「子どもの権利」が侵害されないことを前提に運営指針やガイドラインがつけられていましたが、それを予防するということも大事なことです。残念ながら、虐待など、さまざまな事案が見られるようになり、あってはならないことですが、こうした事案が万が一発生した場合、適切な対応ができるよう準備をしておくということが今回盛り込まれました。

遊びを通して理解する子どもの権利

「遊びや関わりの中で理解すること」、これが児童館の最大の特徴です。そして「共に学ぶ」こと。これは、子どもたちが日常の遊びや生活の中で「子どもの権利」を理解できるような環境や機会を設けることに加え、保護者と子どもが共に「子どもの権利」について学ぶことができるように努めることです。児童館に来る子どもたちには、どんな権利性があるのかということと共に理解をするということです。そういった意味で、先程の「子ども会議」で意見をフィードバックする過程を繰り返す、ということは、子どもたちが自らの権利性を実践的に気が付くことができる機会になるということです。そして、子どもからこのことを聞いた保護者は、児童館では子どものことを大事にしているのだと認識します。

ガイドラインには、「子どもの意見形成支援」という言葉が具体的に組み込まれ、「社会的活動に参加・参画する」という、要するに地域からの要望に、子どもたちの意見も含めて応えるということで、子どもたちも主体的に地域活動に参加することができます。そのために計画的に設ける話合いの場が「子ども会議」です。その「子ども会議」では、子どもの視点や意見を活かし、児童

館の運営や地域の活動に活かせるように努めてくださいと書かれてあります。

そして、「情報提供等の啓発」ですが、これはNPOや関係機関との連携を図るということです。関係機関とは、児童健全育成推進財団を始め、県児連、児童館同士の関係性、母親クラブといった児童館以外の社会資源との関係性のことです。フォーマル、インフォーマルな関係機関との連携は何かあった時に非常に大きな頼りになります。さらに、職員の資質の向上を図るため、研修の機会を保障に努めることが必要です。

居場所を支える「時間（プロセス）」と「人」

まとめに入ります。児童館の役割について、まずは「子ども基本法」の理念を再度確認してみようということです。2つ目は、子どもが遊びや生活の中で自身の権利を理解できる環境や機会を設けること。3つ目は、職員は子どもが気持ちや意見を表現できるように、それを受け止める体制を整えること。4つ目は、子どもが児童館や児童クラブのルール等について意見を表明する機会を持つことです。子どもたちは、遊びの中で状況に応じてさまざまなルールや制限を自分たちで提案してきますが、元も子もないルールになってしまったり、何時までたっても終わらないということもよくあります。でもこれは、結果ではなく、過程なんです。集団で遊びを組み立てようとする

き、子どもたちからいろんなアイデアが次々出てきます。ここが大事なところですよ。それは、子どもが職員と共に考え、共に決めるということの下地になるのではないのでしょうか。大切なことは結果ではなく、子どもに寄り添うプロセスです。そしてもう一つ大事なことは、場所だけではなく、子どもと寄り添う“人”だということです。建物や場所があれば居場所づくりと言われますが、そうではなく、そこに信頼できる、自分のことをよく知ってくれているおとながいるという、この条件がとても重要になってきます。「プロセスと人・スタッフ」、この2つがセットになるのが児童館なのではないかと思います。

子どもの最善の利益を支える児童館へ

子どもには他者から気にかけてもらえる権利があります。これが「子どもの権利」です。他者から気にかけてもらえる「権利」で、日常的・継続的な関わりによって、子どもの最善の利益は保障されます。これには、時間をかけるということも大切です。そのためには、十分なスタッフの配置ということも不可欠になってくるかと思っています。いずれにしても、子どもの最善の利益の保障は、子どもたちに寄り添う児童館だからこそできることではないでしょうか。

ちょうど時間となりましたので、以上で終了いたします。ご清聴ありがとうございました。



テーマ：こどもの思いを汲みとる

こどもの心に寄り添うボディートーク



〔講師〕

栗嶋 紀子さん とぶくじらWORKS代表

小学4年でこどもミュージカルに出会い、19歳から主宰・増田明氏に師事。京都精華大学卒業後、ボディートーク協会職員として活動しつつ、関西の教育現場で表現指導・講演を多数行う。2010年に名古屋へ拠点を移し、「とぶくじらWORKS」を設立。現在は「とぶくじら広場」などでこどもの表現教育を行うほか、保護者向け講習や個人レッスンも展開中。

みなさんは、児童館に来るこどもや親子の思いを知っていますか？積極的に意見が言える子、自分の思いをなかなか表現できない子、いろいろなこどもがいると思います。

児童館が「地域の居場所に」と注目されている今だからこそ、こどもの気持ちを知るための視点やヒントを見つけませんか？

みなさんの児童館が「こどもまんなか児童館」になるためにどうしたら良いのか、体を通して心の在り方を知り、その両面をほぐす実践方法である「ボディートーク」を通して一緒に考えましょう。

1. アイスブレイク 「ピンポンパンゲーム」

参加者は円になり、順に「ピン」「ボン」「パン」と掛け声をかける。それぞれの言葉を言った後に、次の参加者を指差して1名指名してつないでいく形式で行った。司会者の「ラスト1回」の掛け声に合わせて、最後の「パン」では全員で手を叩くことで場の一体感が生まれた。

2. 講師講話 『フック船長とトラウマ』

ピーターパンに登場するフック船長を例に「トラウマとは何か」を考える。華やかな船長像の背景には、「イギリス紳士の家庭で厳しいしつけを受け、抑圧の末に海賊となった人物」という設定がある。ピーターパンと対照的に大人の象徴として描かれた

フック船長は、戦いの中で腕をワニに食べられた経験が「トラウマ」となり、実際に目の前にいなくても「ワニ」という言葉だけで体が固まるようになった。

そのことをこどもに話すと「ワニがいなければ怖くないよね？」と純粋に問い返された。小さなこどもはまだトラウマを蓄積していないため、現実には存在しない危険を怖がらない。大人は経験の積み重ねにより「自分の正しさ」「こうすべき」という価値観や恐れを抱く。大人からこどもに経験や常識を教えることは必要ではあるが、その前にこども自身の「どう感じているか」「何が好きか」という感性を育てることは人生を豊かにすることにつながる。教えられた知識でがんじがらめになるのではなく、自分の望み・好きなものをキャッチできる力を膨らませ、挑戦することが楽しい人生には必要になる。

そのために今日は大人自身が「自分に寄り添う」ことを意識し、自分の好き嫌い、心地よさや不快感を自分の体で捉え直して、こどもと向き合う土台としていく。フック船長がワニへの恐怖をトラウマとし

て抱え続けているのには、周囲に相談できず、感情を内側に閉じ込めたままであるために対策ができていないという原因がある。その感情が爆発し、周りに横暴に振舞ってしまう様子は、ストレスの典型例である。心の内側にいつも不安や怒りを押し込め続けると、やがて病気や強い攻撃性として表れる。

ボディートークでは、心の内側に溜め込まれたエネルギーを出入り自由の状態にし、自分の中の悩みを丁寧に紐解いてまとめていく。それを成功経験として積み重ねることを目指す。

3. ストレスとは何か

ストレスの仕組みを体験的に理解するため、参加者が「手を組む」「腕を組む」ワークを実施した。普段とは逆の組み方をすると「気持ち悪い」「違和感がある」と感じる。この違和感こそがストレスの始まりであり、

解消するには「一旦ほどこいて」、元に戻すだけでよい。

さらに、手や腕の組み方は遺伝的要素があり、話す時の脳の使い方にも影響するといふ。左腕が上に来る人は右脳優位で感覚的・直感的なタイプ、右腕が上に来る人は論理的説明が得意な左脳優位型とされる。こどもと関わる際、相手のタイプに合わせて言葉かけを工夫すると、より伝わりやすくなる。

私たちの心や体にはその人にとって自分だけの在り方がある。ストレスとは「自分にとって不自然な状態を我慢して続けてしまうこと」であり、その違和感に気づき、ほどこくことがボディートークで行われる、体ほどこしである。



4. 心と体の本来の在り方

体の動きには、その人の感情や思考の状態が現れる。「心・体・頭」という三つの働きがある。心の動きは、様々な形で体の内側からの動きにあらわれ、それを思考が制御している。その三つの中心に声があり、懸け橋になっている。気持ちは声にあらわれ、体の調子が悪いことも、声に出てくる。参加者は実際に肩を揺らし、声を出しながら自分の身体がどの部分で軽く揺れ、どこが重く感じるのかを観察した。息が続かない日は心に重いものがある状態、腰が固いと動くこと自体が負担、足先がよく動く日は気分が軽い。このように身体の状態を捉えることで、心の状態も見えてくる。続いて「足先プラブラ」では、動きの幅がその人の行動力や性格傾向を反映する。ワイパーのように大きく動く人は行動範囲が広く、海外への旅行も抵抗が少ない。逆に足が固いと「動きたいけれど動けない状態」であり、実生活でも行動に制限を感じる傾向がある。

膝のバタバタ運動では、膝の裏が固い人は肘も固いことが多く、心まで“意地張り”になりやすいという話があった。家事や作業

中に前かがみ姿勢が続くと心がイライラしてくる経験は、多くの人が思い当たるだろう。膝や肘の柔軟性は、心の柔軟性と密接に関わる。

このような運動をこどもと行うと、学校での体の疲れや対人関係の心の浮き沈みなどを体の動きから読み取ることもできる。



5. 身体から心を読み解き、ほどこすボディートーク

身体の一つ一つの動きは、その人の感性・価値観・ストレス状態を示すサインであり、動きをほどこすことでその心も自然とほどこしていく。

例えば、足首が固く「動けない」と感じる人でも、足を揺らし続けるうちに足首が柔らかくなり、“本当は動きたいけれど動けない”という思いが変化し、「こどもを誰かに預ければ出かけられるかも」「出かけなくても、家が好きだと気づいた」等、心の選択肢が広がる。身体の変化が思考の変化を生み、行動を変える。これがボディートークの基本的な考え方である。

人の身体の反応には本能的な意味があり、大人もこどもも無意識に「心の状態を整える動き」をしている。例えば赤ちゃんを寝かしつける際にお尻を優しくトントンするのは、交感神経で興奮した状態を緩め、副交感神経を働かせるための自然な行為である。私たちがこどもに寄り添うとき、手が思わずある場所に触れることがあるが、それは大人の無意識がこどもの心の状態を読み取っているサインでもある。胸のあたりに手が伸びた時は「この子は悩んでいるのかな？」と問いかけるきっかけになるし、腹部に手が行く場合は怒りのサインかもしれない。励ますつもりで背中を強く押してしまう時は、相手に無理をさせている可能性にも気づく必要がある。大切なのは、無意識に動いた自分の手と、その時の相手の心の状態を重ねて理解すること。

また、胸の中央付近に温かい手を当てると、

切なさや胸の痛みを抱えた子どもの心が落ち着き、筋肉も緩む。この部位は気管支とも関わり、我慢が多い子は風邪ではない咳が出ることもある。背中と胸を手で挟むように支える「ホットサンドイッチ」というケアは、優しく温もりを伝えることで心臓のあたりが温かくなり、悩みを抱えた人は思わず涙が出ることもある。このケアで重要なのは“寄り添う気持ち”であり、相手との丁度良い距離感を自分の内側で感じ取りながら手を当てることが大切である。さらに、幼い子が泣きながら胸のあたりをギュッと縮めるのは、まさに切なさの表れであり、大人が本能的に抱きしめたり胸に手を添えたりする行為は、古くから誰もが無意識に行ってきた“心を整える動き”であるという。ボディートークは、こうした本能的な行為に理論的な視点を加えて説明しており、人は日常の中で自然と身体の内側を整える動作を行っている。



6. 「春風の後押し」で心に寄り添う

自分が普段無意識にしている言動が相手の心の働きに影響していることを知る為、参加者が負の体験をする。

「行くよ」と声をかけ、促す時

- ① 頭を押しながら「行きなさい」
- ② 背中(肩甲骨の間)を押しながら
- ③ 腰(腎臓の辺り)を押しながら
- ④ 骨盤(ウエストより下)の辺りに手を当てながら

4パターンのうちどれが心の働きに心地よさを感じるのか

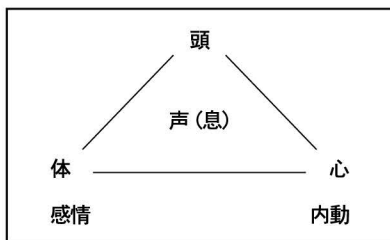
- ① 優しく押されても不快
- ② こどもに対してだけでなく大人に対してもやりがちだが、不快な感情
- ③ 叱咤激励をしているようだが、急かされるような気分になる
- ④ ホットサンドイッチと同じ効果、方法

になるため寄り添ってもらえていると感じる

快の体験だけでなく不快の体験をすることで、される側の気持ちがわかる。不快に感じる促しをされると、頭では理解できるが、心はついていくことができず、嫌な気持ちが残り、大人になっても心を支配されていくことがある。

7. 声は心と体のかけ橋

心と体と頭の中心には息があり、それは「声」となって表れる。頭で描いたイメージは体を動かし、表現し、心には感情がある。心と体の真ん中に声がある。「声」は嬉しい時には弾み、落ち込んだ時には暗くなる。



「オイ」と言いながら色々な所や自分を指差ししてみると、どちらが言いやすいのかわかってくる。ボディートークでは色々な所を指差しした言い方が良いのは外息、自分を指さす方が良いのは内息という。

外息(外に働きかける息)の人の特徴

- ・喋るのが大好き
- ・相手の言っていることに調子よく返事をするが、忘れっぽい
- ・声が大きい
- ・発言もしっかりしている
- ・例えるなら明石家さんま

内息(自分に呼びかける息)の人の特徴

- ・物事をゆっくり考える為、答えを出すのが遅いが自分の言っていることに責任を持つとする
- ・答えがわかっているのだが、自分から挙手しない
- ・意思や熱意が出てくると声は小さいが、言えるようになってくる

人は両者とも持っていてそれぞれ良さがある。

外息の子と内息の子は発語でも差がある。

外息の子は、言葉にならない時期でも何かしゃべっている。内息の子は発語がゆっくりなように感じるが、周りを見ている為、言葉の意味が分かっていることが多い。

8. 演じることで気持ちを読み取る

木村信子さんの「なくしもの」の詩を二人組になって読みながら、こどもの気持ちと母親の気持ちを考えた。

「なくしもの」はせっかちな母とのんびり屋のこどもの会話である。

母はなくしたことについてこどもに「どこでなくしたの」と問いかけていくが、こどもは何度も問いかけられていくうちに、なくした物について思い出し悔しさを感じる。

読むだけでなく、両者を演じてみた

母の気持ちになって演じてみると、怒りが3段階あることがわかってくる。

こどもの気持ちになって演じると、母が怒っているからなくしたものについて冷静に考えようとするのが分かる。

ただ読むだけでなく、講師のアドバイスをもとに演じていく中で母の怒りやこどもの悔しさなどがよく分かるようになった。



みんなで楽しい感情を共感するために

「セリフ返し」をする

全員で輪になり、順番に手振り等付けながら「ワッ」と言っていく。繰り返し行うことでただ「ワッ」というだけでなく、びっくりさせるように言う。

こういうゲームは、内息の子や場面緘黙のこどもは、声を出すことに対して緊張感が強いと言ったか言わないかではなく、心の中で言っている気持ちを察していくことを大切にしていく。そうしていくことで声を出しやすくなる。

9. 自分の心の温め方

人が元気でいるためには、喜びで溢れていることが重要である。自分の心が弱っている時、何をすると元気になるのか知っておくことが大切である。自分の機嫌を自分で治すための方法がたくさんあると、その時の気分によって変えられる。自分自身を知り、自分を大切にすることが一番重要である。

家に帰った時に、ほっとする時間がたっぷりあると、喜びも増えていく。

「だめだ」と思っている時は無理をしないことがとても大切である。

自分に優しくできるから人に優しくできる。

人に優しくできると相手からも優しくしてもらえ、元気になる。

自分自身に優しくすることを大切にしていくと良い。

10. おわりに

保護者との関わりの中で、「うちの子は本当に…」と、こどものマイナスの部分を知ることがあると思う。大人の声かけや励ましで芽を出し、花を咲かせることもある。

保護者は、親だからこそ近すぎて見えない部分があるため、代わりに良いところを見つけていくことでその子が大人になったときに彩りができると思う。そのためにも自分自身を大事にして欲しい。

11. 担当者より

こどもの思いを汲み取るには、まず自分の心を大切にすること、リフレッシュする方法を見つけることで心が元気になることを知りました。また、そうすることで、こどもの心に寄り添えるということを改めて感じることができました。普段無意識に行っている言動が不快な思いになることもあるのだと体験することで知ることができました。こどもの行動のみを見るのではなく、内面を読み取り気持ちを汲み取りながら寄り添えるようにしていきたいと思いました。

第2分科会

テーマ：こどもと遊びをつなぐ

みんなも楽しい！ひとりで来ても楽しい！



[講師]

志村 貴子さん 愛知県子育てネットワーカー

愛知県子育てネットワーカーとして、東三河地域を拠点として活動中。乳幼児親子や子どもに向けての楽しい遊びやおもちゃ、簡単ですぐに実行できる体操の紹介などの活動に取り組み、子育て支援関係者からも厚い信頼が寄せられています。子どもを取り巻く時代背景の移り変わりにアンテナを張り巡らせ、自身も進化中。

児童館には、毎日いろいろな子どもたちが遊びに来てくれますよね。友だちと約束して来てくれたり、親子で来てくれたり。時には一人で来てくれる子もいます。家でも学校でもない「児童館」に親しみを抱いてくれているのだと思います。今回は一人で来てくれる子にスポットをあて、児童館での過ごし方などを遊びのスペシャリストと一緒に考えてみましょう。

1. 講話

<講師と児童館との関わり>

静岡市から豊川市へ移り住んだことをきっかけに、児童館という場所と深く関わるようになった。豊川市に児童館が整備される際には利用者の立場として意見を求められ、動線や倉庫の必要性、事務所からの見通しなど、安心して利用できる環境づくりに携わってきた。

子どもが成長してからは、私自身が児童館で活動する立場となった。蒲郡市の児童館で声をかけていただいたことをきっかけに、親子遊びや小学生向けの遊びを担当するようになり、現在は豊橋市や田原市でも活動を続けている。

今回のテーマである「ひとりで来ても楽しい」という視点について考えた時、私は自分自身の子ども時代を思い出した。静岡市には児童館はなかったが、祖母の家の近くの児童会館という科学館のような施設でよく一人で遊んでいた。夢中になれる遊びが多く、一人で過ごす時間を楽しんでいた経

験は、子どもが一人で来館することの意味を改めて考えるきっかけとなった。

<個人ワーク>

- ①一人で来館する子どもの特徴
- ②どのように過ごしているか
- ③一人でも楽しめる遊びについて今気づくことや思いつくことを書き出した。

<アイスブレイク>

「東西電車」

歌に合わせて体を動かすリズム遊び。
1チーム3～4人に分かれ横一列になり、歌に合わせて足踏みをしなが、3方向のいずれかを向いて、掛け声で左右どちらかを向く。チーム全員が同じ方向を向いていたら成功。

子どもの感じ方の違いを体験してほしいと思い「東西電車」を行った。子どもの中には

「もっとやりたい」と感じる子もいれば、「つまらなかった」と思う子もあり、同じ遊びでも受け取り方は一人一人異なる。児童館に来る子どもも同様に、誘ってほしい子もいれば、そっとしておいてほしい子もいる。子どもの気持ちに寄り添うといっても、全員が同じ思いでいるわけではない。だからこそ、「この子は今どう感じているのか」「どのような距離感が心地よいのか」を丁寧に見取ることが大切である。相手が子どもでも大人でも、人と人との関係づくりの基本は変わらない。育ちや環境が異なる中で、その子に合った関わり方を探りながら寄り添うことが児童館職員として果たすべき大切な役割である。

<アンケート調査結果>

豊川市の全児童館・交通児童遊園、豊橋市、蒲郡市の児童館(数館)を対象に

- ①一人で来館する子の特徴
- ②一人で来館する子の過ごし方
- ③一人でも楽しめる遊びなどの紹介を講師自ら事前に調査を行った。

①一人で来館する子の特徴

保護者が共働きで放課後に家に誰もおらず、学童にも通っていないため、一度帰宅した後に話し相手や遊び相手を求めて児童館を訪れるケースが多く見られた。また、家庭で十分な関わりを得られず、保護者に外出を促される形で来館している子どもも存在していた。児童館に行けば誰かと出会えるかもしれないという期待から訪れる子もあり、児童館が友人との交流の場として機能していることがうかがえる。さらに、「安心できる場所」「自分の居場所」として児童館を捉えている子どもも多く、特に「スタッフと話したくて来ている」という理由が最も多く挙げられた。

②一人で来館する子の過ごし方

来館頻度によって傾向が異なっていた。ほぼ毎日のように来館する子は、スタッフとの会話を楽しみにしており、その他にも宿題に取り組んだり、漫画や本を読んだり、一人でできるゲームや工作、チャレンジコーナー、塗り絵やお絵描き、砂遊び等、自由に過ごしていた。一方で、たまに来館する子は、目新しいおもちゃや珍しい遊具に興味を持って訪れることが多く、何をしたいかわからず館内を歩き回る姿も見られたが、スタッフの声かけをきっかけに工作等の活動に参加するようになるケースもあった。

スタッフの関わり方についてはまず来館した際に「こんにちは」と声をかけることを大切にしているとのことだった。その後は、何をしたいのかを見守りながら様子をうかがい、困っていきそうな場合には声をかけてサポートする。一方で、自ら遊び始めた場合には、しばらく見守りつつ、適切なタイミングで再度声をかけるなど、子どもの主体性を尊重した関わりを心がけているという。

<調査から分かった課題以外の特徴>

来館者の対象は18歳未満だが、館によって乳幼児親子の利用が多い館と小学生以上の利用が多い館という2つの傾向がみられた。また、来館者のほとんどが同じ学校の児童・生徒という館と、何校かが混ざっている館、市外や県外からの来館者が多い館等の特徴も見られた。

また、児童館が子どもにとって「居場所」としてどのように機能しているかについても、多くの意見が寄せられた。児童館は、家で

も学校でもない「第3の居場所」として、子どもに安心感を与える空間となっている。そこでは、年齢の異なる子ども同士が自然に関わり合いながら遊ぶことができ、異年齢交流の場としての役割も果たしている。また、事前に約束をしていなくても、児童館に行けば誰かに会えるという期待感があり、気軽に立ち寄れる「待ち合わせの場」としても機能している。さらに、児童館では、学校とは異なる自由な雰囲気の中で、他校の子と交流することができる場所になっている。不登校で学校には行けないけど児童館には行けるといった使い方をしていることが分かった。

児童館スタッフによる日々の工夫や、子ども一人一人に寄り添った丁寧な対応の様子も明らかとなった。例えば、遊具やおもちゃの配置については、時間帯や来館者の年齢層に応じて出すものを調整する等、空間の使い方に工夫が見られた。限られたスペースを有効に活用するため、床に置く場所を取る遊具は壁面を活用して収納・展示する等、柔軟な対応が行われている。また、来館する子どもの背景にも配慮し、必要に応じて教員等と情報を共有しながら、個々に合った関わり方を模索している様子もうかがえた。加えて、他の利用者に迷惑がかからないよう、館内の安全確保にも十分な配慮がされており、子どもが安心して過ごせる環境づくりに努めていることがわかった。

2. アイスブレイク

「共通点探し」

グループのメンバー同士で3分間の間にできるだけ多くの共通点を探した。

3. グループワーク (ワールドカフェ方式)

個人ワークで書き出した内容についてグループワークを進めた。リーダーだけ残りグループ替え。前のグループで出た話を共有しつつ、普段困っていること等を現場で働いている職員同士で話し合った。



4. シェア

グループ1

一人で児童館に来る子にはさまざまな背景があるが、多くの場合「職員や誰かと関わりたい」という思いが根底にあるのではないかという意見が出た。ただし、関係が近くなりすぎると子どもにとって逆効果になることもあり、「受け止める」と「受け入れる」を区別し、必要に応じて距離を保つ関わり方も大切である。また、児童館での過ごし方は館によって大きく異なり、流行の遊びを持ち込んで遊ぶ館、工作やパズルで過ごす子が多い館など、館によって多様であることが共有された。

グループ2

児童館の運営方針やルールには、同じ県内や地域内でも驚くほど大きな差があることが話題となった。私物持ち込み禁止の館もあれば、ゲーム機や飲み物の持ち込みが許可されている館もあり、その違いに大きな衝撃を受けた。また、シール交換等の遊びの扱いにも館ごとの基準があり、子ども同士の関わり方や家庭環境が反映される面も共有された。自館が“普通”だと思っていた運営が、実は多数派ではないと知り、各館の多様性を改めて実感する場となった。



グループ3

不登校の中学生が児童館を大切な居場所として利用している事例が共有された。職員の出勤前から待つ程の信頼を寄せており、学校には行けなくても外に出るきっかけとなっているという。また、親子で来館する父親がスマートフォンに集中してしまう課題が挙がった。工作の工程に父親を巻き込む工夫を続けた結果、次第に積極的に関わるようになったというエピソードが紹介され、関わり方の工夫の重要性が確認された。

グループ4

職員を独占したい様子を見せ、離れようとする不安定になる子どもいれば、逆に一人で黙々と遊び、自分のペースで落ち着いて過ごす子どももいる等、その姿はさまざまであるという意見が共有された。一方で、“一人で来る子=支援が必要な子”と一括りにはできないという認識も確認された。求めてくる子どもにどこまで応じるべきかが職員にとって大きな課題であり、「やりすぎではないか」という不安と、「実はまだ足りないのではないか」という迷いが常につきまとうという声があった。

グループ5

家にいても暇だったり、なんとなく時間を持って余していたりする子が利用することが多いという声があった。また、児童館に来れば友人や知り合いの大人がいるため、「ここに来れば誰かがいる」という安心感から来館している子どももいる。保護者が働いている家庭が増え、友達の家遊びに行く機会が減っていることも指摘された。そのため、児童館を待ち合わせ場所として利用したり、児童館で友達と遊ぶことを選んだりする子どもが多いのではないかと意見が出た。



グループ6

職員に話を聞いてほしい子どもいれば、自分の思いを伝えたくて話したい子どももいる。話すという行為そのものが、子どもにとって心の安定につながっているのではないかと結論に至った。

また、「こども会議」をどのように進めているかという話題が挙がった。子ども自身が話し合いに参加し、ルールづくりに関わることでトラブルの軽減や環境改善につながることが共有された。大人が一方向的に決めるのではなく、子どもとの対話を大切に、主体的に関われる環境づくりが、安心して過ごせる児童館運営につながるという共通理解が得られた。

グループ7

「暇」「することない」と口にする子を遊びに誘っても断られることがあることから、子どもは遊びそのものよりも職員とのやり取りを楽しんでいるのではないかとこの視点が示された。話題は児童クラブにも広がり、館によって過ごし方が大きく異なることが共有された。決められた行動に沿って過ごす館もあれば、一般来館の子どもと自由に混ざって遊べる館もあるという。また、“漫画総選挙”という企画を実施し、人気作品をそろえる工夫をしている例も紹介された。こうした取り組みを通して、一人でも満足して過ごせる環境づくりの重要性が改めて確認された。

5. まとめ

参加者が現場で感じていることを率直に共有し、活発な意見交換が行われた。現場で日々子どもと向き合っている皆さんの熱意や姿勢は、確実に子どもに伝わっており、「ここに来たい」「職員に会いたい」という思いにつながっているのだと改めて感じた。児童館は、子どもにとっても大人にとっても大切な居場所である。しかし、その形は館の規模や地域性、設備などによってさまざまで、同じ児童館でも条件は大きく異なる。その中で、子どもが「楽しい」「心地よい」と感じられる環境をつくることこそ、職員にとって大切な役割であると感じた。また、一人で来館する子どもへの声かけについても、関わりすぎても、放っておきすぎても難しいという意見が出た。子どもの様子を丁寧に見取り、その子に合った距離感で関わることの大切さを、皆さんの話から強く感じた。「一人で来ても楽しい」という視点を持つことが、これからの児童館づくりにおいて重要であると気づかされた。



6. 担当者より

一人で来館した子への接し方、その子の思い、その子にあった遊びの提案など志村先生と参加者で考えることができて良かったです。児童館で「なにか遊びを提供しないと!」「一人ぼっちはかわいそう…声をかけないと!」など思いがちですが、“何もなくてもホッとできる場、児童館が子どもの居場所”になれるようにしていきたいです。館に戻ってから、一人で来てくれた子に「また来よう」「ここに来れば何かできる」と思ってもらえるような関わりができればいいなと思います。

テーマ：こどもの声からつくる児童館

『こどもたちと「こうだといいな」をかなえよう』

[事例発表] 渡辺 宏明さん 稲沢市西町さざんか児童センター 児童厚生員
 酒井 華奈子さん 東浦町立緒川児童館 館長

「児童館でこんなことやりたい」「こんな児童館がいいな」こどもたちが自分の意見を発信できる場所はみなさんの児童館にはありますか？ 私たち児童厚生員はこどもたちのそういった気持ちを引き出せる存在です！こどもの声に応答してみる。こどもと一緒に「こうだといいな」を形にしていく。児童館でこどもと職員が「こうだといいな」の実現に向けて意見交換をできる場所をつくれるといいですね。実際に児童館で行っている事例を聞き、私たちも一歩を踏み出して実践につなげられるようにグループワークで自分の意見を表明し、意見交換してみましょう！

1. アイスブレイク 「不思議なカード」

最後に出たカードが最初に選んだカードとなり、驚きで場の雰囲気を和ませた。

2. 事例発表 「こどもの声からつくる児童館」 東浦町立緒川児童館 館長 酒井華奈子さん



緒川児童館には2年、その後期間をあけて3年、あわせて5年目になる。以前は町立保育園で長くクラス担任を務めていた。初めての児童館勤務では、業務の違いやコロナ禍の影響もあり、思うような実践ができな

いまま2年間を過ごした。その後、保育園勤務を経て再び緒川児童館に戻り、これまで当たり前としてきたルールや遊び方に違和感を覚え、職員と話し合いながら改善を進めてきた。現在も子ども達の姿に合わせ見直しを続けている。

夏休み期間は、児童クラブの子どもが多く、毎日長時間児童館で過ごす。子ども達が飽きずに過ごせるよう、講座や職員主導のイベントを数多く計画してきた。しかし実際には、「絶対参加なのか」「やりたくない」といった声が聞かれ、子ども達のために行っているつもりの取り組みが、大人側の自己満足になっていたのではないかと感じた。そこで今年度は、思い切って方法を変え、「こども企画」を取り入れた。代表者名、遊びの内容、準備物を書いて箱に入れてもらう仕組みである。初めはなかなか企画が集まらず、不安や焦りもあったが、子ども達に声をかけ続けた。寄せられた企画の中には、花火大会や海への外出など実現が難しい内容もあったが、その都度子どもと話し合い、児童館でできることを一緒に考え、納得してもらった。

夏休みが近づくとつれ、2、3年生を中心に企画が増えていった。職員と企画の代表者で遊び方や日程を相談し、カレンダーを使って開催日を子ども自身に決めてもらっ

た。周知のためのポスター作成にも取り組み、企画が進む中で景品を用意したいという声が上がリ、折り紙で準備する姿も見られた。

自分の企画が形になる経験を通して、再び次の企画を考えたり、友だちが手伝いに加わるなど、自然と仲間が広がっていった。今年の夏休みは、子ども達のおかげで楽しく過ごすことができた。

11月2日に開催した児童館まつりでは、「こども企画」で好評だった遊びをアレンジして提供した。企画者の子ども達は快く協力し、ポスター作成や参加賞の提案、制作にも積極的に関わった。男の子向けだけでなく女の子向けも必要だという意見から工夫が加えられ、子ども達だけで300個の参加賞が完成した。当日は241人が来館し、「どの遊びも楽しかった」という声が多く聞かれた。

「こども企画」を通して、子どもは大人と同じように考え、任された役割をやり遂げ、仲間と協力する力を持っていることを実感した。取り組みに迷っている場合でも、できることから始め、子どもと職員双方の「やってみたい」という気持ちを大切にすることが、次の一歩につながると考える。

3. グループワーク

酒井さんの事例発表を聞いて真似したいところ、この取り組みが素敵だと思うところ、自館でできそうなことを個々に付箋に書き出し模造紙に貼りグループ内で共有した。

グループ1

- 子ども主体の企画を児童館まつりにつなげている

グループ2

- 子どもに企画を任せている

グループ3

- 実現できないことも理由を伝え、企画者が納得できるようにしている

グループ4

- 「こどもまんなか」の姿勢を大切にしている

グループ5

- 子ども企画が職員の自己満足になっていないか、振り返る姿勢

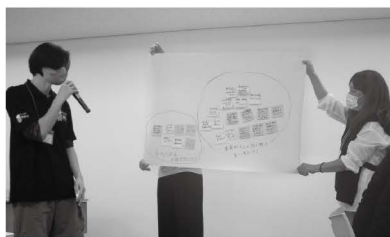
4. グループワークでの話し合いを発表（発表順）

グループ1

子どもの声をまず聞き、確実にいかして企画を作っている点がとても素敵。子どもが主体となることで、大人の知らない遊びが大人の学びにもなっていることが魅力的。また子ども企画が児童館まつりにいかされ、子ども自身が満足感を得られている点がとてもよい。

グループ4

よいと感じた点と、今後取り入れたいことの2つにわけた。子どもの声を大切にし、意見を取り入れようと実践している点はとてもよいと感じた。今後取り入れたいことは、意見を書く用紙作成や大会の実施。どのような形であっても、子どもの声に耳を傾け、それを取り入れていくことが大切だという結論にまとまった。



5. 事例発表「こどもの声を聴く」 稲沢市西町さざんか 児童センター 児童厚生員 渡辺宏明さん



【ティーンズタイム】

児童センターの開館は月～土曜日10時～17時だが、中学生から「時間内になかなか利用出来ない」という声が多く寄せられた為、試験的に夏休み限定で17時～18時半の木曜日に中高生専用時間を設けた。最初は近所の3人のみの利用だったが、子ども達との何気ない会話から“どんなことに興味があるのか”等の声を聴き、それに応じてイラスト教室、ボードゲーム大会、卓球大会等を開催することで、徐々に広まっていった。こうした行事をきっかけに、参加した子どもから「またやりたい」という声が上がリ、中学生自身が企画を担当したり、マジック好きな子がマジックショーを、いつも男子に遊戯室を占領され、使えずにいた女子達がガールズデイを企画したりと、いろいろな自主企画が行われるようになった。試験的に行ったティーンズタイムは「ずっと続けてほしい」というこどもの声から継続されることとなり、現在では1年を通して開催している。

【こども企画委員会】

年4回開催している大きなおまつりを考える会で、やりたい子が集まって、月に1回から2回の会議を行っている。はじめは、おまつりの手伝いに関心がある子を誘い、準備を手伝ってもらうことで、おまつりに関わる経験をするところから始めた。次のおまつりからは“実行委員会”という形でメンバーを募集し、最初はゲームコーナーだけを担当。その次のおまつりでは、参加カードや司会進行をと、おまつりごとに実行委員会が準備をしていく幅を広げていった。これまでおまつりのたびに実行委員を募集していたが、実行委員経験者から「1年を通して活動したい」という声があった為、翌年度から“こども企画委員会”という名前で、現在の形へ変わっていった。

子ども達にとって“この人になら何を話しても大丈夫”といった安心感が自由な発想に繋がる。その為、会議前にはアイスブレイクで気持ちをほぐしたり、

① 誰かが話している時は最後まで聴く

② 他の人の意見を否定しない

③ 良い意見1個より思いついた意見10個という共通のルールを確認したりするようにしている。

【何か企画する委員会】

こども企画委員会のメンバーから「まつり以外のこともやってみたい！」という声があがり、“やってみたい”を一から企画、立案し実行していく“何か企画する委員会”が誕生し、“段ボール迷路”が企画された。大人から見たら「こうやったら簡単だよ」と言ってしまうかもしれないこともたくさんあったが、子ども達が考え決定していくことを大切にしていた。時間はかかるけれど、自分達で考え、工夫し作り上げたことで、子ども達にとって大きな学びと達成感に繋がった。

【商店街のマルシェに出展】

中学生と共に児童センターブースを出店。はじめは児童センター側で準備を進めていく計画だった。しかし、出店する中学生から「自分達でブースの内容を考えたい」という声があり、ブースの内容から一緒に考えることとなった。中学生と話し合い、出し物を“ストラックアウト”と“ぶんぶんごま”に決定すると、その後も自分達のあいている時間を見つけては準備を進めていき、当日も自分達で工夫してブースを展開していた。中学生達は出店することが“やってみみたいこと”になり、楽しいから、自然と積極的に動くようになったのだと思う。

【移動児童館 あおぞらパーク】

乳児親子からの「わが子が動き回ってしまうから子育て広場には参加させられない。でも他の子たちと関わっていたい」というお母さんからの悩みの声から、年6回、稲沢公園にて乳児親子向けに、自由に過ごせる遊び場を開催している。その後、「幼児や小学生も遊べるといいな」という声があり、0歳から15歳まで誰もが自由に参加できる“あおぞらプレーパーク”を計画した。市民団体、近隣大学、地域の方々の協力の下、年1回開催している。

【みんなの声ボックス】

「意見を伝えるのに直接職員に話す以外の方

法がない」というこどもの声から、紙に書いて投函するボックスを設置した。返事を書き、貼り出すことでみんなの声を形として残すようにしている。中には一見無理難題のような声もあるが、そう思うには実は理由があるかもしれない。「なぜそう思ったか」を引き出せるような回答を心掛けている。

【まとめ】

これらの事例を通して、5つの事を感じている。

1. こども達とコミュニケーションをとっていくことで関係性を築くことができ、そこからこどもの声が聴こえてくる。
2. こどものやってみたい気持ちはいつ芽生えるか分からないから、「今だ!」というタイミングを逃さないように、アンテナを張り続けることが大切。
3. 参画かやらせかは“こどもが自分の意志で選択をできているか”であり、こどもが“自分達で決めた”という感覚が持てているかが大事。
4. こども達が自分で一から考え、準備の段階から関わることで自分事としてとらえられるようになる。
5. こどもの声を聴いて進めていく為には、施設長や職員、担当課との丁寧な「ほう(報)・れん(連)・そう(相)」が欠かせない。

6. グループワーク

渡辺さんの事例発表を聞いて真似したいところ、この取り組みが素敵だと思うところ、自館でできそうなことを個々に付箋に書き出し模造紙に貼りグループ内で共有した。

グループ1

- ・何を話しても大丈夫と思える安心感
- ・「やらせていないか?」を常に意識して関わっている

グループ2

- ・自由に意見を書ける用紙や声を出しにくい子への配慮が素敵

グループ3

- ・行政、学校、地域との連携ができています

グループ4

- ・子どもの「今」を逃さない意識

グループ5

- ・難しい環境でも、まずできることを探す姿勢



7. グループワークでの話し合いを発表(発表順)

グループ1

中高生の利用が少ないという現状を中心に話し合いをした。館によっては中学生が来ているところもあるが、多くの館では中学生をよぶこと自体が難しい。時間帯の問題や、来館しても小学生中心の雰囲気になることが課題として共有された。一方で多くのアイデアを教えてもらい、その中から一つでも実践していけたらよいという前向きな意見もあった。ただし、市の体制や制度を調べる必要があり、大きなハードルになることも改めて実感した。

グループ3

行政や学校、地域との連携が取れている点が印象的だという意見が多く出た。それぞれの館でできること、できないことはあるものの、最初から「できない」と決めつけず、様々な可能性に目を向けながら取り組んでいけるとよいという話し合いとなった。

グループ5

公立公営児童館職員が多いグループだったが、「公立でもここまでできるんだ」という率直な感想が出た。こどもの声を大切にす姿勢が、現場職員だけでなく市の担当課などにも理解されているからこそ、様々な取り組みが実現しているのだと感じた。また、「みんなの声」などの意見を集めるだけで終わらせず、フィードバックを行うことの大切さにも気づきがあった。意見が見える形で返していくことで、子ども達や保護者との関係がより深まっていくのではないかと感じた。

8. グループワークで「こども会議ロールプレイ」

5人1グループで1人がファシリテーター役、ほかの4人が子ども役になり「どうしてけんかをするの?」「お金で幸せは買えるの?」などの5つのテーマでこども会議をする。子どもになりきり意見を言う姿とテーマに沿うよう促すファシリテーターの姿が見られた。

9. 担当者から

事例発表をしてくださった酒井さん、渡辺さんは工夫を重ねこどもの声を児童館運営に反映されています。「素敵」と思った取り組みの一部でも実践に取り入れていただけると嬉しく思います。

出前じどうかんーあそびばー

内容

参加12団体、72名の出店者が力を合わせて、愛知県内の児童館でイチオシの遊びを来場者に提供しました。あそびのブースには、身近な材料を使った工作や市町村の特産品・キャラクターを使った遊びなどがあり、来場者は様々な遊びを楽しみました。また、あそびば企画として、「全ブースコンプリート☆ ～文字あつめ～」を行い、来場者が全ブースの遊びに参加してもらえるようにしました。

ブース出店団体

名古屋市児童館	サクッとピンポン玉！ 専用カップを使って、ピンポン玉を集めたり、ピンポン玉についているキャラクターを当てたりして楽しみました。
一宮市立児童館	キラキラ☆スピン 紙皿に8等分の切り込みを入れて羽根を作り、飾りつけをします。上から「フーッ」と息を吹きかけスピンを楽しみました。
春日井市児童館	いろいろむしめがねでひみつのクイズをといてみよう カラーセロハンを貼った虫めがねをかざして、浮かび上がった文字を読んだり絵を見つたりして遊びました。暗号を解く探偵気分！を味わいました。
安城市9児童センター	バックにボン 新聞紙でできた棒を牛乳パックに投げていく遊びです。5本全部が牛乳パックに入るととっても嬉しい！入るまで繰り返し楽しみました。 ぶっ飛び ロケット！ 竹串やスーパーボールでロケットを作りました。高く飛び上がったり、斜めに飛んだりするロケットが面白くてついつい何度も飛ばしました！
常滑市児童館	へんしんバタバタ 正三角の形で蛇腹折りをしてつなげ、バズルにします。好きな絵柄を描いて、ひっくり返して遊びました。
清須市8児童館	音で遊ぼう！！ 紙コップに穴を開け爪楊枝を通して先にプロペラを付けます。いろいろな高さの音の振動でプロペラを回して楽しみました。
みよし市出張児童館	アートバルーンで遊んでみよう バルーンをまげたり、ねじったりしながら、自由に作りました。割れないかドキドキしながらも、自分の好きなものができあがりました。
長久手市市が洞児童館	SDGsころころチャレンジ ゼリーカップに好きな絵柄を描いてころころカップを作りました。作ったカップを坂やボードで転がして楽しみました。
扶桑町児童センターひまわり	八の字風車を作ろう！ 真ん中をくり抜いた紙皿2枚を8の字につなげ、風車を作りました。出来上がった風車を持って走り、回して遊ぶ様子が楽しそうでした。
東浦町7児童館	おだいちゃんを探せ！ たくさんあるキャップの中から、東浦のキャラクター“おだいちゃん”のキャップを制限時間内にいくつ見つけられるかを競って遊びます。10、9、8…カウントダウンにドキドキしながらおだいちゃんを探しました！
武豊町4児童館	ダンボールアドベンチャー ダンボールでつくられた迷路の中を、進んだり戻ったりの大冒険。ゴールできた時は、脱出した達成感でみんな大喜びでした。
設楽町子どもセンター	おとしちゃだめよ ダンボールを切り抜いたコースに沿い、スプーンの上のボールを落とさないように運びました。ボールとスプーンの大きさを調整することで、レベルを変えて楽しむことができました。

次回開催に向けて

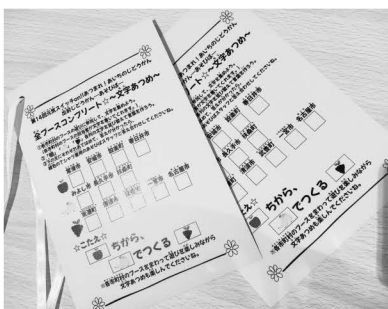
参加者・出店者からは、「身近な素材を使うものが多く参考になりました。」「すぐに実践できるので、勉強になった。」という声や、一般の親子の参加者も多かったことで「出店者側の対応やそれを楽しむこどもの姿も参考になった。」などの声がありました。

ブース運営に関しては「事前準備のやり取りが少なかった。」「もじあつめカードの実施をもう少し早く教えてほしい。」などの意見があり、次の開催に向けての課題が見つかりました。魅力的な内容が多かったことで、次回は参加者がよりたくさんブースを回れるよう、ブースの広さや配置、時間の工夫が必要だと感じました。

児童館職員の交流の場、児童館という施設の発信の場の一つとして、反省を活かしながら、みんなが楽しめる『あそびば』を目指したいと思います。



ようこそ、あそびばへ！！



ブースを回って文字を集めると…



どのブースから回ろうかな？



穴をあけて…つまようじを刺して…



あー！！プロペラがまわったー！！



あれー？おだいちゃんはどこー？



「3、2、1、0〜！」「何個見つけられたかな？」



つい真剣になります。



ふしぎ！文字が浮き出てきた！



私の好きな色。お絵描き楽しい♪



僕の風車！見てみてよく回るよ！



あれあれ？こっちな？



ゴールまであとちょっと!!



キラキラかわいいの大好き!!



どんなコマにしようかな?
オリジナルのキラキラ☆スピ制作中!



えーっと…ここを切って、ここは貼って…



なんだか不思議で面白いー!!



あれー? どこかな? 協力プレイも楽しいね。



コップで上手につかめたよ!



そーっと、そーっと…(ママもドキドキ)



どのスプーンにしようかな? 『激ムズコース』に挑戦!



ポーン!! めっちゃ飛んだー!!
どこに行った?(笑)



遊んでくれてありがとう。また来てね!



何ができるかな? ワクワク!



割れないように…きゅっきゅっきゅっ!



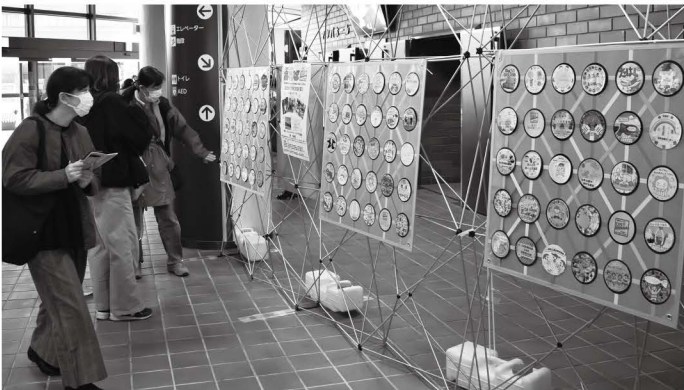
転がり方が面白い! ダンスしてるみたい。



身近な素材で出来るんだ!

アピールカードとは

愛知県内の児童館・児童センターのアピールポイントを“ぎゅっ”と詰め込んだ小さな丸いカードです。県内から集まったたくさんのカードには、児童館職員や子どもたちの思いやメッセージがあふれています。会場では多くの方たちがカードの前で立ち止まり、じっくり、ゆっくり、時には笑顔もこぼれてる暖かい空間になっていました。



情報交換

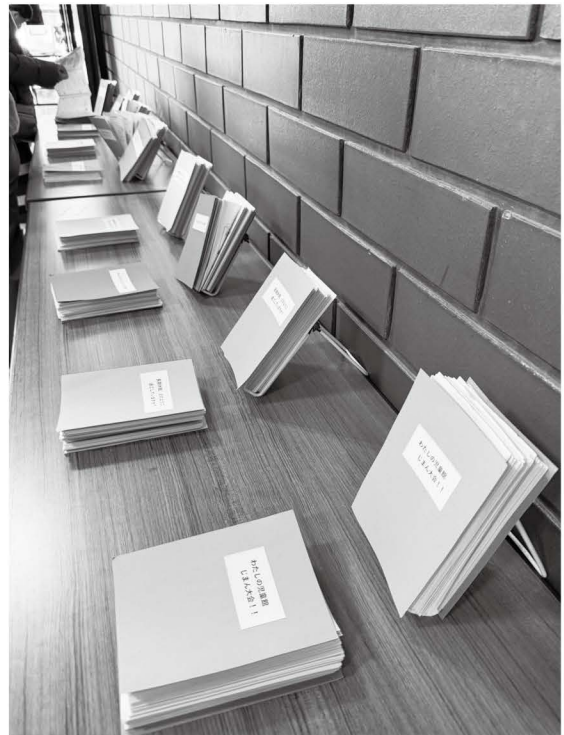
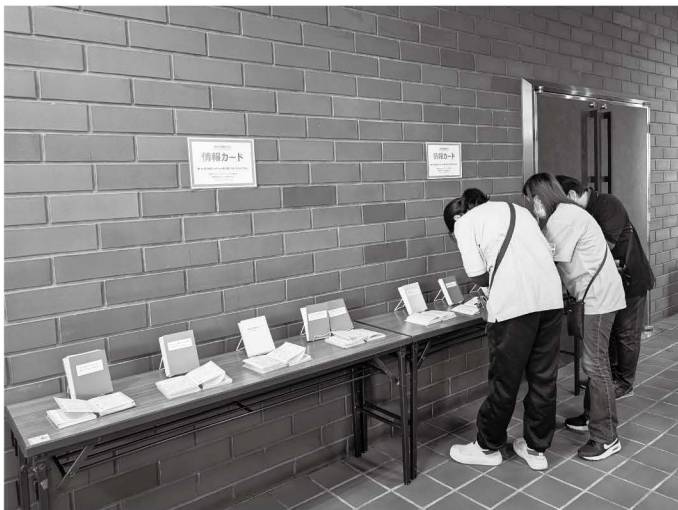
情報カード

こどもたちと過ごす児童館。

毎日の何気ないこどもたちとの関わりの中で感じたことや児童館の活動、取り組みなど、県内児童館のそれぞれのとっておきの情報がたくさん届きました。

こどもたちとのエピソードにほっこりしたり、日ごろの疑問“？”のヒントが見つかるかもしれません。

集まったカードには、児童館職員からのたくさんの思いと情報が詰まっています。



■ 閉会式あいさつ

愛知県児童館連絡協議会
会長
新村 誠



本日ご参加いただきましたすべての皆さま方、長時間にわたりお疲れ様でした。また、実行委員の皆さんにおかれましては、数か月にわたってご尽力いただき、本当にお疲れ様でした。皆さまが楽しみながら工夫をこらし、準備を進められたことで、このような、素晴らしい楽しい大会となりました。誠にありがとうございました。

植木先生の基調講演に始まり、3つの分科会や「あそびば」など、盛りだくさんのこの大会もいよいよ終わりを迎えます。「分科会」では、リラックスした雰囲気ながらも参加者の皆さんの真剣な眼差しや、グループワークの様子、「あそびば」では楽しんでいるたくさんのお子さん、親御さんたちの笑顔が見られ、今まで皆さんが児童館で培ってきたものが存分に発揮された、すばらしい1日であったと感じました。

本日新たに経験され、学ばれたことや、多くの方々とできたネットワークを、ぜひ今後の児童館活動に活かしていただきたいと思います。

なごりはつきませんが、ご参加いただきました皆さまの今後のご健康と一層のご活躍と、児童館の益々の発展を、ご祈念申し上げまして、閉会のあいさつとさせていただきます。

本日は、本当にありがとうございました。



実行委員会



実行委員

		市 町 村	所 属	氏 名
実行委員長		愛知県	愛知県児童総合センター	渡辺 雅樹
全体会部会		稲沢市	大里東チューリップ児童センター	大野 祐嗣
		清須市	清洲児童センター	丹羽 駿介
		北名古屋市	鍛冶ヶ色児童館	武藤 崇仁
		豊山町	しいの木児童センター	服部 加奈子
分科会	第1分科会	長久手市	市が洞児童館	岩月 菜穂香
		東浦町	藤江児童館	畔上 美千代
	第2分科会	名古屋市	とだがわこどもランド	服部 流星
		豊川市	ごゆ児童館	細井 やよい
	第3分科会	一宮市	貴船児童館	齋藤 めぐみ
		大治町	児童センター	立松 三枝
あそびば		豊橋市	こども未来館	小柳津 好章
		津島市	中央児童館	加藤 憲三
		小牧市	小牧児童館	岩井 美喜子
		尾張旭市	本地ヶ原児童館	杉山 慶太
		高浜市	高取南児童クラブ	徳永 紗佳
事務局		愛知県	愛知県児童総合センター	阪野 大介
		愛知県	愛知県児童総合センター	長塚 繭実
		愛知県	愛知県児童総合センター	稲原 啓元
		愛知県	愛知県児童総合センター	海老澤 千佳
		愛知県	愛知県児童総合センター	森 道代
アドバイザー	東郷町	兵庫児童館	高阪 麻子	

第14回 元気スイッチ on!! あつまれ! あいちのじどうかん
つながる力! みんなでつくる児童館
report

2026年3月発行

編集・発行 □ 元気スイッチon!! あつまれ! あいちのじどうかん実行委員会

愛知県長久手市茨ヶ廻間乙 1533-1

愛・地球博記念公園 愛知県児童総合センター内

TEL 0561-63-1110 FAX 0561-63-1116

<https://www.acc-aichi.org>
